

令和2年3月1日（卒業証書授与式式辞）

「旅立つ卒業生に贈るエール」

今年もまた、ここあやめが丘に希望の春、そして旅立ちの春が巡ってきました。今、89名の若者たちがこの学び舎からそれぞれの未来へ飛び立とうとしています。この門出にあたり、本校ゆかりのご来賓の皆様方、並びに保護者の皆様方のご臨席を賜り、長崎県立口加高等学校の栄えある第72回卒業証書授与式を挙げて下さることは、大きな喜びであり、心からお礼申し上げます。

はじめに、保護者の皆様、お子様、お孫様のご卒業、誠におめでとうございます。早朝からのお弁当作り、登下校の送り迎え、病気やけがの時の看病。「おかえり」、「ただいま」というこれまでの当たり前が終わろうとしています。子供の成長に目を細める時もあれば、家族で衝突し、言うことを聞かない子供に腹を立て、悩み、苦しめたこともあったのではないのでしょうか。18年間の子育て、本当にお疲れ様でした。今日は、保護者の皆様の卒業式でもあります。これまでのご労苦に深甚の敬意を表したいと存じます。

さて、72回生のみなさん。卒業おめでとう。当たり前のように制服を着て、口加高校に登校し、当たり前のように授業を受け、当たり前のように仲間と語り・・・そんな当たり前の日常も今日が最後となりました。アメリカの大学では卒業式を commencement といいます。日本語に訳すと「始まり」という意味です。つまり今日はこの3年間の当たり前の日常と仲間と別れを告げて、これからの新しい人生の「始まり」を祝う日でもあります。

いきものがかりというグループに” YELL ” という歌があります「サヨナラは悲しい言葉じゃない それぞれの夢へと僕らを繋ぐ YELL 共に過ごした日々を胸に抱いて 飛び立つよ 独りで 未来（つぎ）の空へ」。未来の空へと飛び立つみなさんの翼は未熟ですが、未熟だから弱いではありません。未熟だから可能性があるのです。今日の話は私から皆さんへ贈る最後のエールです。

皆さんは21世紀の始まりとともにこの世に生を受けました。人々の生活を一変させたパソコンやインターネット、携帯電話が急速に普及した頃です。今や誰もが手のひらにスマホというコンピュータを乗せ、世界中の人と繋がり、情報を得て、発信もする、そんな時代を生きています。しかし、皆さんがこれから飛び立つ世界は手のひらに収まり切れないほど広くて、大きくて、美しくて、そして多様で複雑です。小さな画面では分からないこの広い世界を実際に旅をして、自分の五感で感じ、感動し、自分のこれまでの常識や当たり前が揺らぐような体験を重ねてくださ

い。スマホの中に保存した沢山の写真より、自分の心に一つ一つ蓄えられていく思い出こそが人生を豊かにしてくれるのです。

皆さんが生まれた頃、2度の世界大戦を経験した20世紀が終わり、当時、世界は平和と安定が訪れるという期待感に包まれていました。しかし現実はどうでしょうか。今だに世界から戦火が絶える時はありません。世界を覆う差別、他の民族や宗教への偏見や憎悪、格差の拡大、目先の利益だけを追いかけて他の国々との協調に後ろ向きな世界のリーダー。グローバル化は皮肉にも国同士をつなぐ「架け橋」を作るところか「見えない壁」を作っています。

しかし、今、未来に一条の光が指しています。それは社会の矛盾や危機を敏感に感じている若者たちが立ち上がっていることです。香港、台湾、タイ、そして日本の若者たちも声をあげています。昨年、スウェーデンの16歳の少女、グレタ・トゥンベリさんは国連の温暖化対策サミットでこう演説しました。「私たち人間は絶滅しかかっているのに、大人たちはお金や永遠に続く経済成長といったおとぎ話ばかり。」その訴えに世界中の若者たちが共感し、400万人にもものぼるデモへと発展しました。日本でも長野県立白馬高校の3人が世界の環境難民を支援するためバザーを開きました。また、昨年12月下旬、氷点下の札幌中心部で北星学園女子高校の3年生6人が「気候は変えずに自分たちが変わろう」と市民に訴える姿もありました。たとえ自分の行動が水面に投げた小石のようなことでも、小さな波紋が大きくなるとなり、社会が変わることがあります。私たちは無力ではありません。

作家の司馬遼太郎さんは「坂の上の雲」という作品で、近代国家を目指して日露戦争に突き進んだ明治時代の若者の夢や希望や使命感を描きました。人口増加と経済成長を前提とした国家の枠組みが崩れたこの令和という新しい時代に、私たちが駆け上がる坂の上には一体どんな雲が待っているのでしょうか。

私たちは今、世界がこれまで当たり前とか常識と思っていたものが瓦解し、暮らし方や働き方、社会の在り方そのものが劇的に変化する時代の入り口に立っています。これまでも日本は明治維新や戦後復興など、幾多の転換期を経験してきました。その度ごとに多くの志ある若者が立ち上がり、海外に学び、日本の改革と発展に大きく貢献してきました。しかし今、明治期や戦後と圧倒的に違うことがあります。それは、当時は欧米社会など倣うべきモデルがありました。これからの未来にモデルがないということです。これから私たちは誰も経験したことない新しい世界に足を踏み入れようとしています。未来は私たちで創り出さなければならないのです。改革と創造の原動力、それはいつの時代も若者たち、つまり皆さんです。何かを創造するために必要なもの、それはチャレンジ精神です。どうか勇気を持って一步を踏み出してください。先月お亡くなりになったプロ野球選手で監督であった野村克

也さんのことばを引いて、私は折に触れこう話してきました。「人生に失敗はない。失敗と書いてせいちょうと読む。失敗のない人生こそ失敗である。」

またモデルがないのは未来の社会だけではありません。生き方にもモデルもない時代です。今の大人たちの生き方や価値観が手本とならない時代がやってきます。つまり「自分はどう生きるべきか」とか「幸せとは何か」という人間の根源的な問題に向き合わなければなりません。正解はありませんが、自分なりの答えを模索するときに持っておいてほしい一つの視点があります。それは「利他」という視点です。他人を利すると書きます。自分の利益のためではなく他人のために行動するということです。人に気に入られよう、好かれようではなく、純粹にどうしたら人や社会の役に立てるのか、と考えるみてください。人はいくつになっても自分は誰かの役に立っているとか、誰かから必要とされているという実感ほど嬉しいことはありません。利他の心がある人の元には自然と多くの人が集まるようになっています。そして、その人たちが、皆さんの人生を豊かで彩りあるものにしてくれるのです。

人生は選択の連続です。皆さんは高校卒業後の進路を沢山の選択肢の中から一つ選んだはずですが、何かを選ぶ時にはそれが正しい選択なのかどうか迷い、悩むものですが、私はこの年になって思うことがあります。それはどんな選択をしたかということよりも、その選択が正しかったという生き方をすることが大切だということです。つまり選択した後、自分がどう生きるかにかかっているということです。人生には正解も間違いもありません。どう自分が納得する人生にするかです。船の進路を決めるのは潮の流れではなく、風でもありません。帆の向きです。行き先を決めるのは、自分の意志でどの方向に帆を向けるかです。皆さんは自分の人生の主人公です。世界でただ一人の自分の人生を作っていく責任者なのです。私は50年以上生きていますが、いまだに悩み、迷い、時に苦しみ、冷や汗をかきながら生きています。それもまた「生きる」ということです。

いよいよお別れの時です。ふるさとの桜に見送られて、間もなく異郷の地に向かうみなさん。私も大学に進学するため18歳で島原の実家を出ました。その数か月後、母から1通の手紙が下宿に届きました。そこにはこう書かれていました。「あなたが使っていた部屋にいくと、あなたの香りがして涙が出てきます。」これが我が子を遠くに出す親の親心です。皆さん、どうか忘れないでください。ふるさとは皆さんの身を案じ、帰りを待ち詫びている家族がいることを。どうか思いを馳せてください。西の空に沈む太陽は今日もふるさとの空を赤く染めていることを。どうか思い出してください。ここにいる仲間たちはこの空のどこかで今日も懸命に生きていることを。そして、どうか誇りにしてください。この口加高校が皆さんの母校であることを。

以上が私から皆さんに贈る最後のエールです。皆さんとは2年間の付き合いでした。ここにいる89名はいつも私の自慢であり、誇りでした。本当にありがとう。胸を張って堂々と次の空へ羽ばたいてください。以上、式辞といたします。

令和2年3月1日 長崎県立口加高等学校長 狩野 博臣